

第26回エジプト学先端研究国際会議 (CRE26、2026年) 参加記

柴田 広志

立命館大学 衣笠総合研究機構／中東・イスラーム研究センター 客員研究員

CRE(Current Research in Egyptology) について

エジプト学先端研究国際会議(以下CRE)は、古代エジプトを研究する、とくに若手研究者たちの登竜門と云うべき国際学会である。第1回の会議は2000年に英国オックスフォードで開催され、以来ヨーロッパ各地を会場として、毎年開催されてきた。2025年には初めて会場がヨーロッパを離れ、エジプトのカイロで開催された。そして26回目を数える今回は、東アジアで初めての開催となった。その会場となったのは東京文化財研究所、会期は2026年7月11日から15日にかけてであった。なお、最終日はエクスカースションである。

昨年までその存在も知らなかったCREであるが、昨年あたりからエジプト学関係者から、噂程度にその情報が伝わってきた。この会について本格的に知ることになったのは、西洋古代史研究に関係するメーリングリストを介してのことである。

開催費用のクラウドファンディング

2026年に入って早い段階で、CRE26実行委員会のメンバーである宮川創准教授(筑波大学)から、クラウドファンディングサイトのREADYFOR(<https://readyfor.jp/>)を通じての会議開催の費用への寄付を求める案内が回ってきた。過去25回と違い、地中海周辺地域から遠く離れた日本にヨーロッパ・中東方面からの参加者を招くには、渡航援助が必要となるということである。第一次目標が無事に達成されたところで、追加で目標金額が上方に修正された。折からの円安

に加えて、年明けに始まったアメリカとイスラエルによるイラン攻撃もあり、渡航費用が跳ね上がっていることも多大に影響したとのことだった。当初見積もりよりも開催費用がかさんでしまったとの開催者側の要請は、もはや悲鳴に聞こえた。

早々にクラウドファンディングへの協力を済ませ、Facebook等による情報拡散にも協力しながら、内心で「アメリカの起こした無名の師のしわよせが、こんなところにまで…」と、嘆かずにはいられなかった。中東に無知なトランプ政権の愚挙は極東で開催される学術的な国際交流の場の負担を倍加させている。かつて旅したイランとエジプトの景色を思い浮かべながら、深々と嘆息せざるをえなくなってしまった。

最終的に寄付金額は当初目標金額を大きく上回る570万円近くに及んだ。広範にわたるエジプトへの関心を裏打ちした数字ということが出来よう。



セッションでの個別報告(筆者撮影)



ポスター・セッション A：コアタイムの様子（筆者撮影）

シンポジウムへの参加

せっかく日本で開催されるシンポジウムであるからには、参加しない手はない。…そう思っていたのだが、6月6・7日に出身校・京都府立大学で行われた西洋古典学会での報告+受付業務（詳細はこちら→<https://clsoc.jp/meetings/2026/meeting.html>）で奔走していたこともあり、7月に入るまでCREのことを綺麗さっぱり忘れており、参加登録は7月になって慌ててする始末。できればすべてのプログラムに参加したかったのだが、前期セメスター終了間際のこの時期に、それは無謀の極みである。泣く泣く7月11日（土）・12日（日）の二日のみの参加とした。

初日の昼過ぎに会場の東京文化財研究所に到着すると、すでにシンポジウムの参加者で会場は賑わいを見せていた。13時の開会式は、準備委員会の肥後時尚氏（筑波大学助教）の挨拶の後、在日エジプト大使 Ragui Mohamed Mohamed Eletreby 氏からの挨拶などでつつがなく終了し、各セッションに移行した。セッションのプログラムはCREの公式ウェブサイト（<https://cre26.tokyo/program.html>）をご覧ください。ただれば解るように、同時並行で3つの部会室に分かれて進行した。

ヘレニズム以前のエジプトに関しては門外漢である私にとってありがたかったのは、ヘレニズム時代やローマ時代のエジプトに関係した報告も含まれていたこと

である。おかげで質疑に参加することもでき、物見遊山の延長という事態にならなかったのは幸いだった。無論のこと、専門以外の報告から多くの知見を得たことは、いうまでもない。若手研究者による登竜門とのことだったが、報告者は若手はもとより壮年の研究者たちも多く、大規模なプロジェクトの途中報告なども拝聴できた。

また、個別の部会報告だけではなく、二日目の午後にはポスター・セッションのコアタイムの時間が設けられ、ポスターを前にしながら制作者と気楽に意見を交換することができた。このあたりは、考古学が強いエジプト学ならではのだろう。ポスター・セッションの場では第一合成株式会社ブースも出展しており、同社が扱う考古遺物の計測で使う真弧などの器具は国外の参加者たちの関心を大いに惹いていた。

各セッション後の活動も充実しており、初日は小野塚拓造氏（東京国立博物館学芸員）の基調講演に引き続いて東京国立博物館の東洋館見学、二日目は田澤恵子氏（古代オリエント博物館研究部長）の基調講演後



東京国立博物館（1日目）（筆者撮影）



オリエント博物館（2日目）（筆者撮影）

に古代オリエント博物館の見学があった。田澤氏は2009年にエジプト西方沙漠ハルガ・オアシスでの調査を通じて旧知であり、久闊を叙する機会を得たのは大変に幸いだった。

プログラムは未だ多く残っていたが、残念ながら私はオリエント博物館までで時間切れとなり、後ろ髪を引かれる思いで京都に戻った。参加することは適わなかったが、3日目に行われた懇親会、および5日目の鎌倉へのエクスカージョンも好評のうちに終わったとの報告を、後日、実行委員会よりメールで頂戴した。

おわりに

CRE26で感じたのは、古代エジプト研究の質量ともの充実だった。同時に、これだけの国外の研究者を集めたシンポジウムを運営しえた日本の古代エジプト研究の厚みも同時に感じさせた。また、国際情勢の変化は、国際的な催しに即座に影響する。それを痛感させたシンポジウムだった。

最後に、今回のCRE26の実行委員会と、運営に携わった多くの院生各氏の仕事に感謝して、稿を閉じたい。

【著者プロフィール】

柴田 広志（しばた・ひろし）

立命館大学 衣笠総合研究機構 / 中東・イスラーム研究センター 客員研究員

専門：ヘレニズム時代史、特にセレウコス朝とペルガモンの歴史

主な業績：「ヘレニズム時代のアレクサンドロス大王像」『古代文化』62巻4号、2011年；「ペルガモン王国「独立」の記憶の編集—前3～前2世紀の政治動向を手がかりに」中井義明・堀井優編『記憶と慣行の西洋古代史—エジプトからローマまで—』ミネルヴァ書房、2021年；”The Background of the Attalid’s Secession from the Seleucids’ Suzerainty”, *JASCA (Japan Studies in Classical Antiquity)* 6, 2026 など。

